

# 反改憲運動

## 通信 第6期

1部 200円  
2011.5.18 No. 24

〒101-0063 東京都千代田区神田淡路町 1-21-7 静和ビル 2A  
淡路町事務所気付 Tel. & Fax. : 03-3254-5460  
E-Mail : han-kaiken-editor@alt-movements.org  
Website : <http://www.alt-movements.org/han-kaiken/>  
年間定期購読料 4,000円 (2010. 6~2011. 5)  
郵便振替 00190-7-11558 「反改憲」運動情報通信

### 認識の「溝」喪失の中で「市民によるコントロール」は可能か 4月27日：福島原発事故に関する公開質疑～事態の見通しと対応策

福島（東電）原発震災後、連日のように開かれる院内集会の中で、今回の公開質疑の特徴は、与党民主党を含む超党派議員有志（窓口は服部良一議員）と脱原発派の専門家、市民が原子力安全・保安院、原子力安全委員会と直接向き合い、問いただし、対策の実行を迫るという構図にあった。

東電や保安院、安全委員会をはじめとする「原子力利権複合体」による情報統制が「安全神話」を作り上げ、巨大大事故を引き起こしたとすれば、その解体は「知る権利」の行使と開かれた議論によってなされるべきだ。公開質疑は、市民が交渉主体として登場することをも目指した。

では、終わってみてどうだったか。参加者は約250人と盛況だったが、内容は極めて不十分だった。今回の獲得目標は、事故拡大の危険性を明らかにしたうえで、その際の緊急避難態勢をきちんと整備させることに置いた。そのため、原発事故の現状評価については、事前に資料請求を行いあらかじめ把握したうえで、当日の議論に臨もうとした。しかし、保安院や安全委員会が請求資料を提出したのは当日午前。分析するどころではない。未回答項目も多く、大幅な重複も含まれる杜撰なものだった。

さらに、出席した担当者は責任をもって説明できる権限と水準を備えていなかった。本来なら、保安院長や安全委員長もしくは代理レベルの人間が出席すべきだろう。それでも、長年当局との交渉をしてきた人に言わせると、まだましな回答だったというのだが。国会議員には、課長や課長補佐が「サンドバッグ」役として登場するやり方を改めさせるよう、強いイニシアチブの発揮を望みたい。

内容に関して言えば、「わかりません」という答弁が連発された。山崎久隆さんは、「保安院が『希望的観測』を述べなかったのが、強く印象に残った」と感想を述べている。大事故という現実を前にして逃げるのではなく危機的状況を明らかにせざるを得なくなったのだと。「認識に差が無かったこと、

それが恐怖の根源」だと山崎さんは記す。

やり取りの中で、槌田敦さんらの具体的提案を、担当者が好意的に受け止めた場面も見られた。在野も含めたあらゆる知見を結集する態勢が未だに整備されていないという不作為は許されないものだ。「惨事を市民のコントロール下に！」（注）というフランス知識人による声明の訴えを現実化するために、「公開質疑」の手法が役割を果たせると良いのだが。

後半、崎山比早子さんの「事故を招いた責任者が『何ミリーベルト』という基準を決めるのはそもそもおかしい」との発言に会場から大きな拍手が湧いた。加害者が責任を問われぬままにその権限を維持し、生命に関わる決定権を持ち続けている構図こそが根本的に改められるべきだと思う。

限られた時間の中で、事故対処の問題等に時間が取られてしまい、肝心の避難態勢に関する質疑は深まらないまま終わってしまった。保安院側の質問への回答説明は、今後の事故拡大時の避難態勢ではなく、現状の避難対応の解説に終始した。質問の意図が全く理解されていなかったようだ。今後の避難態勢拡大を検討する余裕すらないとすれば、恐ろしい事である。

無策の繰り返しは許されない。例えば飯館村は本来もっと早期に、政府の責任において避難がなされるべきだった。子どもへの被曝基準「年20ミリシーベルト」は今なお撤回されず、SPEEDIも未だに本来の役割を果たしていない。「予防原則」に基づき、避難態勢を整備させるという最大の獲得目標が持ち越しとなった以上、第2回を設定せざるを得ない。できれば5月中に開催できるよう準備を始めている。注目と積極的な参加を呼びかけたいと思う。

（5月11日 杉原浩司／福島原発事故緊急会議）

（参考）「福島原発事故情報共同デスク」<http://2011shinsai.info/> \*当日の様子は動画で見ることできる。

（注）<http://appeldefukushima.wordpress.com/>

▶今年5月の世論調査の結果は、憲法9条「改憲反対」59%、「改憲賛成」30%。昨年からの推移は「賛成」6%アップで、「反対」は8%ダウン。ここで賛成はまだ30%と読むのか？ 一方、軍事活動が前提の自衛隊支持率は恐ろしく高い。災害救助活動への評価は、3・11以降の4月の世論調査によれば、95%が「評価する」という。自衛隊と米軍の連携に対しても「適切」が88%。▶世論調査はしょせん世論調査。それにして

## 憲 喧 嘩

も、9条改憲支持が30%で自衛隊支持が95%とは論理矛盾では？ また、米軍への思いやり予算1881億円が3月31日に決定し、それへの批判は世論とはならない。む〜。▶せっかく上がった「思いやり予算」を被災者救助へ、の声をなくしてはなるまい。そしてもう一つの主張、自衛隊をなくして災害救助隊へ、はありだ。災害対策の強化と軍隊は反対の方向にある。まだやるべきことはあるのだ。頑張ろー。（大）

# 原発なしで暮らしたい100万人アクション in ヒロシマ

4月24日(日)、広島市内のハノーバー庭園で、「原発なしで暮らしたい100万人アクションinヒロシマ」が開催され、ピースウォークには1500名が参加した。4月26日のチェルノブイリデーには、原爆ドーム前からのデモに福岡からのバス一台での参加をはじめ各地から1000名が結集した。主催者は「原発なしで暮らしたい人々」。山口県上関町田ノ浦での海上埋め立て工事を阻止し続けている虹のカヤック隊のメンバー、上関原発阻止に思いを寄せる各地の人、福島原発大事故を受けて危機意識を持った広島県内の母親たち、そして広島県内の反基地・反改憲・反天皇制の私たちが結合した主体である。

24日の集会は、使用する電源が太陽電池・ソーラーパネルと廃食油、被災地支援としての「東日本大震災 つながりめくもりプロジェクト」カンパ集め、若者主体のライブ、スピーチと盛りだくさんの内容である。スピーチは、上関現地、被爆者の豊永恵三郎さん、岩国の「愛宕山を守る会」代表の岡村寛さん、被爆医師の日本被団協原爆被爆者中央相談所元理事長の肥田舜太郎さん、「福島」の大塚愛(ハヒロアクション福島原発40年)さんと、どれも感銘深い迫力あるものだった。

大塚さんは次の言葉で締めた。「今日広島町の町にバスで入った時、そうか被爆者と呼ばれていた人たちも8月6日までそこで普通に生活していた人だと気がついた。今、福島県で被災している人たちも普通に暮らしていた。放射能は見えな

いから風景が変わらずに残っているから事実を認識することの難しさも実感している。人はお金がなくても土と水と空気さえあれば生きていける。どんなに札束があってもそれだけでは生きていけない。私たちの命を支えるものはこの大地と水と空気。それを福島の人たちは奪われてしまった。これからずっと永い間、どうか福島の人たちに思いを寄せて関心を持って愛を送ってください。この教訓からエネルギーシフトへ、転換に向けて人がつながっていききたい。ハヒロアクションが去年始まったとき、私はジョン・レノンのイマジンをフラダンスで踊る＝「アロハでハヒロ」と名付けて福島の仲間と練習していた」。集会最後に、「イマジン」の曲に合わせて大塚さんの音頭で参加者全体でフラダンスを踊った。老いも若きも子どもも、女も男も、ハンディを持つ者も弱い者も強い者も、皆が福島への気持ちを一つにして。そしてピースウォークに躍り出た。

4月26日のデモ隊は、まず経産省の出先機関、中国経産局、広島県、広島市への申し入れ行動を経て、中国電力本社前で抗議の声をたたきつけた。3・11以降も続いている上関原子炉設置許可申請に伴う追加地質調査活動の中止をやめろとの声が席卷した。この推進のための地質調査、発破作業を止めなければならない。

(久野成章／原発なしで暮らしたい人々)

## 原発問題を生存権から議論 施行64周年憲法記念日集会

平和フォーラムは5月3日に日本教育会館で、「施行64周年憲法記念日集会」を開催しました。集会第1部はシンポジウムで、「安全に生きる権利」をテーマに議論を行いました。司会は江橋崇さん(平和フォーラム代表・法政大学教授)。パネリストは石丸小四郎さん(福島県双葉地区原発反対同盟代表)、満田夏花さん(国際NGO FoE Japan)、山浦康明さん(日本消費者連盟事務局長)の3人です。東日本大震災や福島原発事故の直後であることから、発言は憲法の定める生存権から、原発震災問題を捉え返すものとなりました。

石丸さんは冒頭、「原発は不条理、理不尽、世代間不公平で、差別的。落ち度のない人々が全てを放棄して故郷を去り、子どもが逃げ回る。一方、推進してきた人々は安全地帯で、『ただちに健康に影響はない』と強調している」と話しました。また文部科学省が福島県の幼稚園や小中学校での被爆線量の許容値を、年間20ミリシーベルトにしたことに関して、「原発の中の放射線管理区域を上回る数値。それを子どもたちに強要することが、許されているのか」と強く批判しました。さらに今後必要な運動課題として、①子どもたちを被爆から守る、②放射能の封じ込め、③責任の徹底追及、④脱原発プロセスの明確化、⑤電力寡占体制の解体、⑥徹底した損害補償——の6点をあげました。

満田さんは、前日に行った政府交渉について報告しました。

子どもへの20ミリシーベルト適用は、文部科学省が原子力安全委員会の助言を受けて決定したものです。しかし交渉で原子力安全委員会は「20ミリシーベルトを基準としていない」、「20ミリシーベルトを安全とするといった委員も専門家もいない」と発言したそうです。満田さんは、「こんな議論をしている時間はない。一刻も早く撤回してもらわなければならない。いまま福島で被爆している子どもたちがいる」と訴えました。

山浦さんは、原発事故、復興問題、食料主権の3点について解説しました。食料についてはTPPなどの議論の中で、「国内農産物に放射能汚染の問題があると、多少農薬を使っても外国の農産物で食卓を賄おうという話も出てくる」と指摘しました。原発事故による食品への放射能汚染については、「厚生労働省がヨウ素は飲料水・牛乳300ベクレル、野菜2000ベクレルの暫定的数値を決定し、食品安全委員会が1週間で承認した。数値緩和反対の要請書を出し、食品安全委員会をけん制している」と報告しました。また復興議論の中で、ゼネコン重視、企業優先、東電救済の政策が進む可能性を指摘し、「主権者として納税者として、しっかり監視しなければならない」と訴えました。

集会には全国から600人が参加しました。

(八木隆次／フォーラム平和・人権・環境)



# 大江・岩波沖縄戦裁判「上告棄却」

## ——日本軍の「集団自決」強制が法廷で認定

2011年4月21日、最高裁判所は平成20年(ネ)第1226号出版差止め等請求事件——いわゆる「大江・岩波沖縄戦裁判」の上告を棄却、および上告不受理の決定を行った。これによって、08年10月31日の大阪高等裁判所の控訴審判決が確定し、被告・大江健三郎氏と岩波書店の勝訴が確定した。

この裁判は05年8月、沖縄戦当時の座間味島司令官・梅澤裕氏と渡嘉敷島司令官だった赤松嘉次氏の弟・秀一氏が大江氏の著書『沖縄ノート』で「住民に『集団自決』を命じていないのに命じたように書かれた」として、大江氏と岩波書店を「名誉毀損」で訴えたものである。そもそもこの裁判は、元東京大学・拓殖大学教授であった藤岡信勝氏が「自由主義史観研究会」が05年6月に日本軍が沖縄住民への「集団自決」を強制したという記述を教科書から削除せよ、という意見書を出版社に出すと決議したことに端を発する。その狙いは「天皇の軍隊」の名誉回復だった。沖縄戦で軍隊は住民を守るよりも死を強制したという事実は、沖縄現地では歴史的体験である。その事実を隠ぺいし、再び軍隊を肯定し賛美する国民を育成しようという意図のもとに、「大江・岩波沖縄戦裁判」は仕組まれたのだった。

この意図は、いったんは勝利を手にした。文部科学省は高校日本史教科書に対する06年度検定において、日本軍が「集団自決」を強制した事実を示す記述を削除せよという検定意見を出し、各教科書から「軍の強制」は削除された。そのこと

は沖縄の人々に大きな衝撃を与え、沖縄戦の真実を歪曲する検定意見の撤回を求める運動が保守・革新を問わず盛り上がった。07年9月29日、11万人以上が参加した県民大会で、沖縄の怒りは頂点に達した。また、今まで口を閉ざしていた沖縄戦体験者から新たな証言が数多く語られたことは、裁判でも真実の究明に大きな力となった。

この裁判を支えたのは、「大江・岩波沖縄戦裁判を支援し沖縄の真実を広める首都圏の会(東京)」「大江健三郎・岩波書店沖縄戦裁判支援連絡会(大阪)」「沖縄戦の歴史歪曲を許さず、沖縄から平和教育をすすめる会(沖縄)」の各市民団体である。全国の市民・研究者・教科書執筆者らが参加し、裁判の傍聴、報告会、学習会、署名活動などを通じて裁判を支援してきた。今回の最高裁決定は、これらの運動に携わった多くの人々の手で勝ち取ったものである。

大阪高裁判決は、原告側が司法の力を利用して歴史事実を歪曲しようとしたことの不当性を明確にした。これまで文部科学省は「裁判で係争中」を一つの根拠に、検定意見の撤回を拒否しつづけてきたが、その根拠は既に失われたのだ。にもかかわらず、高木文科大臣は最高裁の決定直後の4月26日、検定意見を撤回する考えがないことを表明した。検定意見撤回と沖縄戦記述の回復を勝ち取るまで、この闘いはまだまだ続くのである。

(芦澤礼子／大江・岩波沖縄戦裁判を支援し沖縄の真実を広める首都圏の会)

## 空港と原発——巨大科学技術を考える

「いま成田空港で何が起きているのかプロジェクト」(成田プロジェクト)は、来る5月28日に「空港と原発——巨大科学技術を考える」というテーマの集会を行います。

当初は「成田空港 騒音問題と一坪共有地を考える」というテーマで集会準備をすすめていました。三里塚の東峰地区では、巨大なジェット旅客機が90～100デシベルの大騒音をまき散らしながら、農家の頭上わずか40メートルを1分半～2分間隔で舞い降りてきています。そして、成田国際空港会社は強権的に一坪用地を巻き上げようとしているからです。

ところが3・11東北大地震による多数の死者とたいへんな被害の発生。さらに福島第一原発(1～6号炉)と第二原発(1～4機号炉)では炉心溶融、使用済み燃料冷却材喪失事故、水素爆発など予断を許さない危機的状況が続くなか、成田空港問題とともに深刻な原発事故についても考え、巨大な科学技術が私たちに何をもたらしているのかを見つめ直し、これからの未来を考えていくことになりました。

成田プロジェクトは、2009年4月にスタートし、成田空港＝三里塚問題にこだわりつづける浅井真由美さん(『労働情報』編集長)、大野和興さん(地球的課題の実験村共同代表)、梶川涼子さん(成田バスツアーの会)、鎌田慧さん(ルポライター)、白川真澄さん(『ピープルズ・プラン』編集長)、高木久仁子さん、高橋千代司さん(三里塚一坪共有者)、中里英章さん(成田バスツアーの会)が呼びかけました。①三里塚農

民との交流②成田空港B滑走路による人権・生存権や環境、安全性の問題点③航空機事故、騒音・低周波被害、環境汚染、グローバル社会のなかでの空港などの学習会を行ってきました。

呼びかけ人の鎌田さんは、「青森の六ヶ所村にも通ったが『過激派』を入れると三里塚のようになってしまうとキャンペーンをやられ、住民間で分断しあっていった。延伸されたB滑走路が供用されるが、ジャンボジェット機の轟音はすさまじい。島村家に対して『死ぬ』というものだ。人道問題として空港会社の暴挙を許してはならない」(09年9月／映画『三里塚 第二砦の人々』上映&トーク)と訴えてきました。

今回の福島原発事故に対しても、「原発ほどカネで人心を惑わす汚い事業はないですよ。危ない物は1基でも2基でも同じと、地元は次々に受け入れる。毒まんじゅうです」と原発体制によって引き起こされる問題点を批判しています(毎日新聞・特集ワイド／11年4月28日)。さらに「原発反対と書き続けながら大事故を防げなかった。僕も切迫感が足りなかった」と自戒をこめながら反原発運動の取組みに奮闘していく決意を述べています。

鎌田さんのアピールを受け止めつつ、ともに人権・生存権破壊を許さない取組みを加速させていきましょう。

(山下一夫／成田プロジェクト)

(※集会・行動情報欄参照)

# 6.11脱原発100万人アクションに参加・賛同を!

福島原発事故は、もうこれ以上、原発に頼る生活をつづけることができないことを、私たちに知らしめました。膨大な犠牲という現在進行形の残念な被害によってですが。

しかし、政府、電力業界、専門家たちは、自分たちの利権を守るために脱原発への道を選択しようとしていません。浜岡原発の一時停止は、大きな一歩ではあったとしても、あくまで安全確認が取れるまでの一時的な停止にすぎません。わざわざ、「他の原発は停止の必要性がない」とも明言しています。

また政府は、福島の子どもたちに通常の年間被曝許容量1ミリシーベルトの20倍もの被曝を強いる政策をとっています。放射線被曝の被害を軽視することで、脱原発への気運を沈めようという意図が明確です。さらには、マスコミの報道は、広告スポンサーの電事連などに配慮し、脱原発デモなどの報道を抑制しています。

政府や電力業界や専門家の巻き返しを許してはなりません。脱原発への政治的圧力を、これまで以上の、マスコミも政府も無視できない大きな規模で示すことが問われています。

福島原発事故から3ヶ月、6.11脱原発100万人アクションは、その一歩です、そしておおきな一歩にしなければなりません。

このアクションは、デモやパレードだけでなく、講演会や

上映会や学習会など多様なアクションを歓迎しています。詳しくはHP (<http://nonukes.jp/wordpress/>) をご覧ください。すでに全国各地域で準備が進められています。ウェブサイトでは賛同団体と賛同個人も募っています。ぜひ、ご協力ください。

また、100万人アクションは、全世界へ向けて呼びかけています。フランスをはじめ各国で呼応して動き始めています。福島原発事故による被害や環境への影響は、日本だけに留まるものでもなく、世界の市民が大きな関心を示しています。原発推進へと転じようとしてきたドイツやイタリアでは、脱原発への方向転換が進んでいます。他方、地球温暖化対策として「原発ルネッサンス」を進めてきたグローバルな原発業界も、脱原発の気運を封じ込めるために、今後あらゆる手段を行使してくるでしょう。

日本の脱原発運動が、どれだけ大規模に展開できるか否か、それが世界の原発の行く末にも直結しています。

脱原発の一点において、すべての人々と団体が協力してアクションを起こすことを訴えます。6.11、脱原発のアクションを日本各地で、そして全世界で100万人を超える規模で実現しましょう!

(宮部彰／みどりの未来・運営委員)

## ◇ 番外編 ◇ 反原発を読む

## ジブシーからフクシマへ

小社は、1978年から脱原発についての書籍を数多く出版してきました。その中でも、とりわけ大きな反響を受けているのが『原発ジブシー——被曝下請け労働者の記録』(堀江邦夫著、フリーライター)です。美浜・福島・敦賀の原発下請け労働者として被曝しながら労働を続けた著者が1979年に出版した本書は、電力会社の説明とはまったく異なる原発の真実を明らかにし話題になりました。原発を内部からみただけでなく、下請け労働者としていわば「下から見た」原発の真実は私たちを慄然とさせました。危険な被曝作業の中で見聞した労働者の本音や労働教育、労働者の保護などについて「下請け」という最前線から捉えた本書は、原子力行政がいかに虚構に満ちているかを余すところなく明らかにしています。本書『原発ジブシー』は今年5月、増補改訂版が出版されました。

『原発を止めた町——三重・芦浜原発三十七年の闘い』(北村博司著、ジャーナリスト)は、三重県南部の漁村芦浜で計画された中部電力の芦浜原発建設に反対し、故郷を守るために闘い、ついに建設計画中止を実現した普通の市民たちの37年に亘る活動を記録した本です。原発を止めた運動を紹介した本書には「原発には楽観的になってはいけなく、しかし反原発運動では悲観的になってはいけなく」というメッセージがこめられています。初版は2001年に出版されましたが、2011年4月に新装版が出版されました。

2008年に出版しました『まるで原発などないかのように——地震列島、原発の真実』(原発老朽化問題研究会編、研究者・技術者・弁護士・報道記者のグループ)は残念ながら予言の本になってしまいました。地震多発国日本に原発はそもそも危険すぎ、原発老朽化に伴い日々危険は大きくなっていると、3年前に警告を発していました。本来は廃炉にしなければならぬ多くの老朽原発が、科学的根拠もなく約2倍に延ばされたことに強く抗議した本でもありました。

はからずも福島原発事故でその危惧は現実のものとなってしまう、今年3月の震災後に緊急出版しましたのは『福島原発人災記——安全神話を騙った人々』(川村湊著、文芸評論家・法大教授)です。レベル7までの深刻な事態を惹起した事故は自然災害ではなく人災であると喝破した本書は、原発運営の杜撰さと無責任さをすべて実名で明らかにした記録です。著者である川村氏は今でも文芸評論家として著名でしたが、本書では専門にこだわって原発と無関係でいることの危険性も訴えており、大反響を呼び重版が続いています。

まだ収束が見えない福島原発事故は、世界的なニュースとなり「フクシマ」という地名は原発を検討するときに不可避なキーワードにすらなっています。この機会に、ぜひご覧ください。

(菊地泰博／現代書館)



# 反改憲ニュースクリップ

## 2011年4月21日～5月7日

### 浜岡は第一歩

**【4月21日】〈代替エネルギー〉**環境省は国内で自然エネルギーを導入した場合にどの程度の発電量が見込めるか、試算した結果を発表した。風力発電を普及できる余地が最も大きく、低い稼働率を考慮しても、最大で原発40基分の発電量が見込める結果となった。風の強い東北地方では、原発3～11基分が風力でまかなえる計算だ。同省は震災復興にあたり、風力発電を含めた自然エネルギーの導入を提案していく方針だ。〈オスプレイ〉米メリーランド州で開かれた国際海洋航空宇宙展で、V22統合開発計画の責任者であるマシエロ大佐が記者会見し、垂直離着陸機MV22オスプレイの初の国外部隊を2011年10月に沖縄で編成すると述べていたことが分かった。

**【4月22日】〈沖縄ノート〉**ノーベル賞作家、大江健三郎さんの著作「沖縄ノート」の記述などを巡る名誉毀損訴訟で、最高裁が旧日本軍隊長らの上告を棄却する決定を出し、「旧日本軍が住民の集団自決に関与した」と認定した2審が確定したことを受け、大江さんは会見を開き「ようやく強制された集団死が正しく認識される」と訴訟終結の意義を語った。「文科省はこれまで係争中を理由に(軍の強制を記した)教科書を印刷できないとしてきたが、もう係争中ではない」と指摘。「今回の決定で沖縄の基地問題が一変するわけではないが、沖縄戦のことを覚えていてもらいたい。沖縄ノートを高校生に読んでほしい」と若者たちへの思いを語った。

**【4月25日】〈原発事故〉**共産党の井上哲士参院議員は参院決算委員会で、東京電力福島第一原子力発電所事故に関連し、同党が炉心溶融も想定した対策の必要性を訴えるなど、国会で長年、原発の危険性について警鐘を鳴らしてきたことを強調。そのうえで、「原発安全神話のもと、重大事故への構えも備えもなかったことが深刻な事態を作り出した」と歴代政権や東電の対応を批判した。民主党政権にも矛先を向け、「安全神話を受け継いだ責任も当然問われるのに、真剣な反省があるのか」と訴えた。これに対し、参考人として出席した内閣府原子力安全委員会の班目春樹委員長は「事故を防げなかったことを深く反省する」と終始、平身低頭だった。

**【4月26日】〈デモ〉**旧ソ連(現ウクライナ)のチェルノブイリ原子力発電所事故から25年となるのを機に、放射性物質が広範囲に拡散した欧州各地では反原発のデモや集会が繰り返された。ドイツとフランスでは、福島第一原発事故で反原発の機運が高まっていることもあり、主催者側によると、10カ所余の集会に計10万人以上が参加。仏東部ストラスブールと独西部ケールの国境を流れるライン川の橋の上では、約700人が原発事故による死者を模して一斉に横たわり、原発を推進してきた政府に抗議した。原発が存在しないオースト

リアでも、約1000人が首都ウィーンの広場で集会を開いた。反原発の立場を国際的に打ち出しているファイマン首相も出席し、「チェルノブイリ事故の後でも世界で約160の原発が新設されている」と非難した。

**【4月28日】〈改憲〉**超党派の新憲法制定議員同盟(会長・中曽根康弘元首相)は「新しい憲法を制定する推進大会」を開き、衆参両院の憲法審査会で改憲論議を早急に始めるよう求める決議を採択した。決議は、東日本大震災を踏まえ「復興を新しい国づくりの第一歩と位置付ける必要があり、新しい国づくりの理念は新憲法に盛り込まれるべきだ」と訴えた。参院憲法審査会では、定員や表決の方法などを定める規程が未整備のままで、規程が制定されている衆院側も、委員が選任されていない。中曽根氏はあいさつで、「世論調査を見れば改正賛成が大部分だが、国会が即応していない」と述べ、議論の停滞に懸念を示した。また、民主党の鳩山由紀夫前首相は「改正のきっかけの年になることを念じる」と語り、自民党の大島理森副総裁は「震災だからと言って作業を止めるわけにはいかない。むしろ進めるべきだ」と強調した。

**【4月30日】〈世論調査〉**共同通信社が実施した全国電話世論調査によると、東日本大震災や福島第1原発事故での菅直人首相のリーダーシップについて「発揮していない」とする回答が76%に達し、3月下旬の前回調査の63%から12ポイント増えた。原発事故への政府対応を「評価していない」とする回答も70%と前回から12ポイント増。被災地支援への取り組みに関しては「評価していない」とする回答は52%と半数を超え、前回に比べ13ポイント増となった。原発事故対応は「あまり評価していない」との回答が43%、「全く評価していない」が27%、「大いに評価」は1.8%、「ある程度評価」は25.9%だった。

**【5月1日】〈脱原発〉**共産党の志位和夫委員長は全労連の中央メーデーで「原発からの撤退を決断すること、原発をゼロにする期限を決めたプログラムを策定することを強く求める」と訴え、「脱原発」姿勢を強く打ち出した。共産党はこれまで「原発依存のエネルギー政策からの転換」を主張する一方、東日本大震災後も「すぐには出来ない。いまず原発を止めろ」という議論は無理。まずは安全最優先の原子力政策に切り替えるべきだ」としていた。これに対して志位氏は1日、「今の原発技術は本質的に未完成だ。しかし、政府は『安全神話』にしがみつき、安全対策をやらなかったことが大事故につながった」と批判。福島原発事故が収束せず、影響が広がっていることを踏まえ、「脱原発」路線をより鮮明にした。

**【5月7日】〈デモ〉**「脱原発の一点でつながろう」と市民有志による「原発やめろデモ！」が東京・渋谷や原宿周辺で行われ、約1万5000人が参加した。東京電力福島第1原発の事故を受け、杉並区高円寺北のリサイクルショップの経営者やミュージシャンらが企画した。先月10日の高円寺でのデモに次ぐ第2弾で、参加者は「バイバイ原発」「エネルギー政策の転換を」などと書かれた手作りのプラカードを掲げた。川崎市から来た妊娠7カ月の大富香織さんは「静岡県御前崎市の浜岡原発の停止が実現しそうなのでほっとしている。生活を見直し、子どもが安全に暮らせる社会を築きたい」と話した。

# 私も一言 130

成澤宗男 (『週刊金曜日』編集部)

支配層の意を体するという機能が『文藝春秋』にはまだ健在なのかなと思わせたのが、「総力特集 東日本大震災 日本人の再出発」と銘打った「5月特別号」だ。巻頭が、侍従長・川島裕の「天皇皇后両陛下の祈り 厄災からの一週間」。内容は触れないが、右頁にタイトルと文章の冒頭部分があり、左頁は「東北地方太平洋沖地震に関する天皇陛下のおことば」である。

支配層の常ならぬ危機意識の現れと思えなくもないが、ならば敗戦時と同様、天皇に課せられた役割は変化していない

ということなのか。実際、4月24日に明仁が「被災地」の北茨城市を訪れた際、「天皇陛下は、原子力についてもよくご存じで、原子力に対して理解を深め、しっかりした知識に基づいて行動すべきだ」という趣旨の発言をされた」(『中国新聞』)という。この日、同じ場所を東電社長の清水が訪れているが、とくに破綻した「原子力安全神話」の蒸し返しだ。

宮内庁によれば、「両陛下」の4月12日のスケジュールが、「ご説明(東京工業大学原子炉工学研究所所長 福島原子力発電所について)」とある。氏名は記されていないが、原発御用学者からの人選であるのは間違いない。未だ「脱原発」を口にしていない彼らの「ご説明」を聞いているから、原発を「しっかり」管理しろと言いたかったのだろう。冒頭の「おことば」では、天災による「被災者」と、原発事故という人災に見舞われ、企業責任を追及できる「被災者」をごちゃまぜに扱っている。両者を一緒に扱って原発事故の犯罪的本質を隠蔽し、引き続きありもしない原発の「安全」を挙国一致で推進する——。天皇の言動から透けて見える支配層の思惑はこんなところだろうが、懲りない連中と言うしかない。

## 集会・行動情報 5/21 ~6/4

▶5/21(土) コンサート・上映会 KATARUNGAN  
——ロラたちに正義を◆13:30~◆アリソン・オパオン(フィリピン音楽家)、SOSO(ミュージシャン)◆武蔵野スイングホール(JR中央線武蔵境駅下車)◆1800円(前売り1500円)◆主催: フィリピン元「慰安婦」支援ネット・三多摩(ロラの会、042-234-5498)

■中野共同行動連続講座「そのとき自衛隊・米軍はどう動いたか」◆18:00~◆講師: 池田五律◆中野区勤労福祉会館3F和室(JR中央線中野駅南口下車)◆主催: 戦争と治安管理に反対する中野共同行動(090-5344-8373)

■第60回市民憲法講座「原発震災~いま、何が起きているか」◆18:30~◆お話: 山崎久隆(たんぽぽ舎)◆文京区民センター3C会議室(都営地下鉄三田線・大江戸線春日駅下車)◆800円◆主催: 許すな! 憲法改悪・市民連絡会(03-3221-4668)

▶5/22(日) 反原発自治体議員・市民連盟結成集会◆13:00~◆講演: 菅井益郎さん(國學院大学教授・市民エネルギー研究所)◆全水道会館(JR・都営地下鉄三田線水道橋駅下車)◆1000円◆問い合わせ: 反原発自治体議員連盟(準備会)事務局(03-5211-7199)

■原発をとめろ! 核の真相を明かせ! こどもを救え! 京都デモ◆14:00三条大橋下(西側)、15:00デモ出発◆主催: 原始力の会とピースウォーク京都(080-5356-2140)

▶5/27(金) 反戦・反核春の国会ピースサイクル◆8:45◆JR市ヶ谷駅——防衛省——都教育委員会——東京電力——外務省・内閣府◆主催: ピースサイクル2011全国ネットワーク(080-5386-9921)

■くりかえすな! 原発震災 つくろう脱原発社会 集会とデモ◆17:30開場、19:00デモ出発◆日比谷野外音楽堂(東京メトロ霞ヶ関駅・都営地下鉄三田線内幸町駅下車)◆共催: 原発とめよう! 東京ネットワーク、再処理とめたい! 首都圏市民のつどい

▶5/28(土) 空港と原発——巨大科学技術を考える

◆14:00~◆講演: 鎌田慧(ドキュメンタリー作家)「巨大科学技術の時代」、報告1: 伴英幸(原子力資料情報室)「福島原発で何が起きたか」、報告2: 平野靖識(地球的課題の実験村)「騒音直下の東峰から」◆パネルディスカッション: 司会・大野和興、パネリスト・鎌田慧、伴英幸、平野靖識、柳川秀夫、石井紀子◆コア・いけぶくろ(豊島区民センター)5階音楽室(池袋駅東口下車)◆500円◆成田プロジェクト(03-3818-1835)の事務所)

■ジェンダーの視点からメディアを考える◆14:00~◆池田恵理子(女たちの戦争と平和資料館)、竹信三恵子(元朝日新聞記者)◆東京ウィメンズプラザ視聴覚室(JR山手線渋谷駅、東京メトロ表参道駅下車)◆1000円◆主催: アジア女性資料センター(03-3780-5245)

■彦坂諦さん講演集会——4.29反「昭和の日」行動◆15:00~◆お話: 彦坂諦◆ピープルズ・プラン研究所(地下鉄江戸川橋徒歩7分)◆主催: 4・29反「昭和の日」行動実行委員会(090-3438-0268)

▶5/29(日) 第24回反基地駅伝大会◆10:00~◆立川市砂川学習館南側広場(砂川秋まつり広場)◆同実行委員会(042-575-9036 テント村)

▶6/3(金) 中学校歴史教科書に書かれた沖縄◆18:30~◆報告: 小牧薫(大江・岩波沖縄戦裁判支援連絡会事務局長)、石山久男(「沖縄戦首都圏の会」呼びかけ人、依義文(子どもと教科書全国ネット21事務局長)◆コアいけぶくろ(豊島区民センター)音楽室(池袋駅東口下車)◆500円◆共催: 大江健三郎・岩波書店沖縄戦裁判支援連絡会、大江・岩波沖縄戦裁判を支援し沖縄の真実を広める首都圏の会、沖縄戦の歴史歪曲を許さず、沖縄から平和教育をすすめる会

▶6/4(土) アジ連公開講座「中東民衆革命はどこへ」◆18:30~◆湯川順夫(翻訳家)「チュニジアから始まった革命の波」、田浪亜央江(パレスチナ研究)「アラブ民衆革命とパレスチナ」◆コアいけぶくろ(豊島区民センター)第2会議室(池袋駅東口下車)◆500円◆主催: アジア連帯講座(03-3372-9401)